

P1 一鰓弓症候群を疑わせる一例

A case with suspected the first branchial arch syndrome

○山口 登、松石裕美子、岩本 勉、増田啓次、中村由紀、鈴木 陽、野中和明

Noboru Yamaguchi, Yumiko Matsuishi, Tsutomu Iwamoto, Keiji Masuda,

Yuki Nakamura, Akira Suzuki, Kazuaki Nonaka

九州大学大学院歯学研究院 口腔保健推進学講座 小児口腔医学分野

Section of Pediatric Dentistry, Kyushu University Faculty of Dental Science

第一鰓弓症候群は、第一鰓弓に何らかの異常が発生し、ここから作られる骨や軟組織に発育障害が起こる結果、主に下顎や耳、口などに変形を生じる先天性疾患である。患児は、初診時年齢12歳6か月の女兒。平成20年3月に、上顎左側犬歯の埋伏と萌出方向の異常を指摘され、近くの歯科医院より当科へ紹介された。これまで、合指症術後と左耳の感音性難聴の既往がある。顔貌所見として、左右非対称で下顎がやや左側へ偏位している。口腔内所見として、現在、混合歯列期で、下顎の左側への偏位を認めた。X線診査により、難聴を示している左耳と同側下顎骨の発育不良がやや認められた。また、乳歯が多数残存しており、生理的歯根吸収が遅れていた。主訴の上顎左側犬歯埋伏に関しては、CT検査の結果、上顎左側中切歯の歯根に近接しており、一部歯根の吸収を疑わせる所見が認められたため、直ちに開窓牽引を開始した。残存している乳歯に関しては、永久歯の萌出を促すために順次抜歯を行うこととした。本症例は、第一鰓弓症候群と確定診断を下すには至っていない。しかし、第一鰓弓に由来する部位に異常を生じているため、今後、慎重に治療計画を立案し、成長発育の経過観察を行っていく必要のある症例と思われる。